

話しことばの終助詞について

—— 映画にみる女性文末詞 ——

小 原 千 佳

1. はじめに

1. 1 女性文末詞の意識

私たちが普段使用する日本語の中には、男女差があり、「女ことば」と「男ことば」に分けられ区別される。女性ということを強調するような、例えば「女子大生」「女子高生」「女子アナ」「女弁護士」などの捉え方が問題であるとする、性差別、いわゆるジェンダーの問題につながるとして社会問題とされることがある。

これらとは別に、もう一つ、「女ことば」「男ことば」があり、特にその代表として話しことばの終助詞があげられる。女性が話す場合、「いいわ」「そうよ」を使用し、男性が話す場合は、「いいぞ」「そうぞ」が使用されるように、女性と男性が同じことを言おうとした時に表れる差のことで、女性と男性とで異なる文末表現をすることを指す。本稿では後者にみられる男女差の女性文末詞を主に取り上げる。

日本語には男女による差があるといったが、近年、その男女差がなくなってきた傾向にあると言われる。これまで、女性が話すことが一般とされていた「～わ」「～だわ」「～かしら」などの終助詞は使われなくなっており、そのかわりに女性が男ことばを使用するケースが多くなってきているという。

1. 2 研究目的

今日、女性文末詞の衰退が問題視されているのをよくみかける。私自身、現在、日本で生活するなかで、従来の女性文末詞（従来の女性文末詞の中で代表するものは、「わ」を使用した文末詞（終助詞）である）を使用して話す人を見かけることがほとんどない。しかし、日常生活で使用することがない女性文末詞ではあるが、テレビや映画では、時代設定や制作された年など

から、女性文末詞の使用をみることに気がつき、女性文末詞がどのように変化しているのだろうかということを確認するため、本稿を進めていくことにする。

1. 3 研究方法

話しことばを使用しているものには、いくつかあるが、今回は映画を取り扱うことにする。映画は日本語を母語としている日本語母語話者が出演している日本映画を使用していく。注意点として、映画は制作する側の意図等が存在しているのは事実であり、日常会話の文末詞と同じとは言えないデータであるが、そのような中でも変化がみられるのではないかと考える。

2. 先行研究

2. 1 女性文末詞の変化

日本語における話しことばの男女差について、従来の研究ではどのように捉えられてきたのかをみていく。

女性文末詞が現代社会の若い女性にあまり使用されなくなっている実情は、1990年代から多くの先行研究から指摘されている。特に女性文末詞の代表的なものとしてされる「わ系」（「わ」「だわ」「わよ」「わね」「わよね」等）や「かしら」の衰退傾向は、尾崎喜光（1999）、中島悦子（1997）、小川早百合（1997、2004）などにより指摘されている。また、20代、30代では、水本光美（2005）、水本光美他（2006）、水本光美・福盛壽賀子（2007）の調査研究において、ほぼ消滅していることが明瞭にされている。

小川早百合（2004）によると、辞書説明では、典型的な女性文末詞とされるものは「わ」と「かしら」である。また、マグロイン花岡直美（1997）は以下のように解釈している。「わ」や「の」などは主張度が低く相手との心的距離を縮めようとするため丁寧な言い回しであり、従って「女らしさ」が存在する」としている。鈴木英夫（1998）は明治前期から昭和後期にかけての文学作品中にみられる女性文末詞を調査した結果、明治以後、女性文末詞は「わ」を中心として体系を作っていたとしている。そして、昭和後期の初めにおいて、文学作品中で積極的に用いられていたワ・ノ・ネ型のうち、「わ」の優位性が以後変動し、多様な文末詞が新たに使用されるようになったと分析している。

女性だけが使用する文末表現の使用状況に関するアンケート調査・談話データなどの立証研究はいくつかある。

井出祥子（1979）のアンケート調査をまとめた川口容子（1987）は、男性と女性がともに区別せずに使用する種類というものが少なくないと指摘している。

小林美恵子（1993）の高校生の男女を対象に行ったアンケート調査では、使用する文末表現には確かな男女の差はなかったとしている。また、従来、男性的とされた表現（男ことば）を女子も使用しているということを報告している。

また、三井昭子（1992）による、家庭内での自然発話を対象に分析した調査で、対象は少人数ではあるが、終助詞「わ」を含む文末表現の使用が若年層になるほど低くなっていることを報告している。尾崎喜光（1997）は職場における女性文末詞に目を向け、「わ」の使用は実際の会話では非常に少なく、「だわ」は、もはや皆無に近いとまで述べている。

2. 2 女性文末表現の分類

女性文末詞を分類する上で、男性が主に使用するとされる文末詞、いわゆる「男ことば」と、女性が主に使用するとされる文末詞、「女ことば」をまず明確にする必要がある。そこで、有泉優里（2013）のジェンダー識別傾向の調査結果によって男性形式に分類されたのは「だぜ」「だろ」「んだろ」「んだぜ」「ぞ」「よな」「だい」「かい」「だ」「だな」「のか」「んだ」「だろう」「な」「だよ」「だろうな」である。女性形式に分類されたのは、「わよ」「わ」「なの」「かしら」「ね」「よ」「よね」「のね」「なのよ」「のよ」「ね」「でしょうね」「んでしょ」「んでしょ」「(ん) だもん」「でしょ」「の」「でしょ」である。

2. 3 女性文末詞の印象

女性文末表現が衰退している、またジェンダーの問題に晒されているとはいえ、女性文末詞が与えるイメージが存在しているのではないかと考える。水本光美・福盛壽賀子・高田恭子（2008）によると、脚本家という限定した意識調査ではあるが、興味深いものがあった。調査の結果、脚本家が女性文末詞に持つイメージで、半数以上が「女性的でやわらかい」という回答が得

られたそうだ。その他にもプラスのイメージには、「上品」、「丁寧」、「やさしい」、「美しい」、「知的で教養がある」としたイメージがあるようだ。マイナスイメージとしては、「現代的ではない」、「中高年の婦人ことば」、「非現実的」などの現実には使用されていない相違点を意識していると報告している。マイナスイメージもあるが、全体的にはプラスのイメージを持っているということである。

3. 女性文末詞の映画における使用調査

3. 1 調査方法

本稿での調査方法は、日本映画作品の中から女性の発話を書き起こし、女性文末詞ごとに分類、集計をしたデータと結果について記述していく。

3. 2 使用映画について

今回調査に用いた映画は、『時をかける少女（1983）』、『時をかける少女（2010）』、『ゼロの焦点（1961）』、『ゼロの焦点（2009）』の4つである。

3. 2. 1 映画の選考基準

まず、女性文末詞の変化を調査するにあたって、時代、年代が重点的になってくる。そこで、映画の制作された時代が異なり、なおかつ、映画の内容に大まかな共通点がある作品、つまり、リメイク作品を選ぶことにした。

3. 2. 2 調査する文末詞

調査対象とする女性文末詞は、次の文末詞である。

- (1)わ (2)だわ (3)わね (4)わよ (5)体言+よ (6)体言+ね
(7)のよ (8)のね (9)かしら (10)もの (11)の

以上11の女性文末詞についての調査を行っていく。

4. 作品ごとの調査結果

4. 1 『時をかける少女（1983）』

4. 1. 1 作品の概要

1983年公開の大林宣彦監督による映画である。調査対象は、主人公である芳山和子とする。時代設定は、映画が制作された80年代であると考えられる。

内容は、和子は実験室でラベンダーの香りをかぎ、気を失ってしまう。この事件から、和子は時間の感覚がおかしくなったような奇妙な感じに襲われる。ある時、大きな地震と火事があったのだが、次の日に学校でそのことを話すとそんなことはないと言われる。不思議に思いながらも、過ごしているとその日のうちに地震と火事が起こった。その後、時間の空間を行き来できると知る。

4. 1. 2 調査結果

女性文末詞を調査した結果、以下の通りになった。

1983	わ	だわ	わね	わよ	よ	ね	のよ	のね	かしら	もの	の
和子	26	9	4	2	21	17	4	3	5	3	30

『時をかける少女 (1983)』

4. 2 『時をかける少女 (2010)』

4. 2. 1 作品の概要

2010年公開の谷口正晃監督による映画である。調査対象は、主人公の芳山あかりと、あかりの母である芳山和子とする。時代設定はこれも制作された2010年を舞台としている。『時をかける少女 (1983)』の時代を進め、芳山和子が母となり、娘の芳山あかりが事故に遭い動けない母・和子に代わって、過去へタイムリープするという話である。

4. 2. 2 調査結果

女性文末詞を調査した結果、以下の通りになった。

2010	わ	だわ	わね	わよ	よ	ね	のよ	のね	かしら	もの	の
和子	1	1	0	0	1	3	1	0	1	0	2
あかり	0	0	0	0	8	11	0	0	0	1	13

『時をかける少女 (2010)』

4. 3 『ゼロの焦点 (1961)』

4. 3. 1 作品の概要

1961年公開の映画で、監督は野村芳太郎である。調査対象は、主人公の鶴原禎子と、もう一人の主人公、室田佐知子とする。この作品は原作の小説の

時代設定が終戦から13年後のようである。1958年頃であるから、おおよそ60年代、つまり映画の制作された時代とほぼ変わらないであろうと思う。

禎子は結婚してすぐに夫は仕事で金沢へ旅立つ。しかし、予定の日を過ぎても帰ってこない夫、そこへ夫が行方不明になったという連絡があり、急ぎよ金沢へ向かう。夫の足取りを追う過程で室田佐知子と出会う。佐知子は煉瓦株式会社の社長夫人である。そして、金沢で夫の隠された過去を知ることになる。

4. 3. 2 調査結果

女性文末詞を調査した結果、以下の通りになった。

1961	わ	だわ	わね	わよ	よ	ね	のよ	のね	かしら	もの	の
禎子	4	0	2	1	3	6	0	1	2	0	5
佐知子	12	3	1	2	8	17	7	5	1	0	5

『ゼロの焦点 (1961)』

4. 4 『ゼロの焦点 (2009)』

4. 4. 1 作品の概要

2009年公開の映画であり、監督は犬童一心である。この作品は『ゼロの焦点 (1961)』のリメイク映画である。こちらも調査対象は、主人公の鶴原禎子と、もう一人の主人公、室田佐知子とする。時代設定は、1961年の作品と変わらず、おおよそ60年代であるが、制作されたのは2009年である。内容は1961年の作品と概ね同じである。

4. 4. 2 調査結果

女性文末詞を調査した結果は、以下の通りである。

2009	わ	だわ	わね	わよ	よ	ね	のよ	のね	かしら	もの	の
禎子	1	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
佐知子	8	1	0	2	14	8	9	0	2	0	7

『ゼロの焦点 (2009)』

5. 考察

5. 1 女性文末詞の使用比率

作品ごとの調査結果によって表にした文末詞を、それぞれグラフに起こしていくことにする。

図1『時をかける少女(1983)』、図2『時をかける少女(2010)』、図3『ゼロの焦点(1961)』、図4『ゼロの焦点(2009)』以上の様とする。

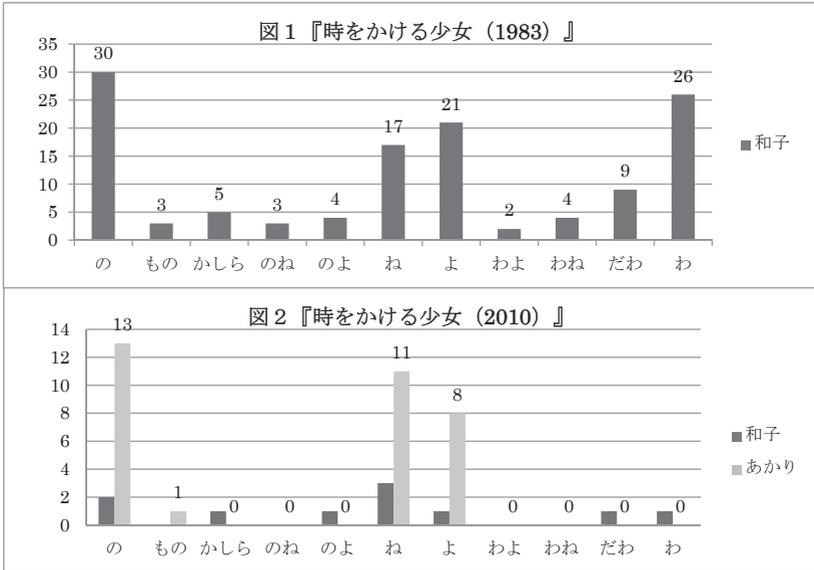


図1と図2の『時をかける少女』について、図1和子では「の」の使用が一番多く、次に「わ」「よ」「ね」「だわ」の順に使用が多い。図2和子では「の」が一番多く、続いて「ね」が多くみられた。図2のあかりは、「の」「ね」「よ」の使用が多い。この2つのを比較して言えることは、80年代の和子は代表的な女性文末詞「わ」「だわ」を多く使用しているのに対し、2000年代の和子は、年齢を重ねてより女性文末詞が増えているかと思われたが、制作年の影響なのか女性文末詞の使用があまり見られなかった。しかし、「かしら」の使用が見られた。あかりは、現代の女性にも見られる女性文末詞の使用があった。わ系の文末詞は見られなかった。

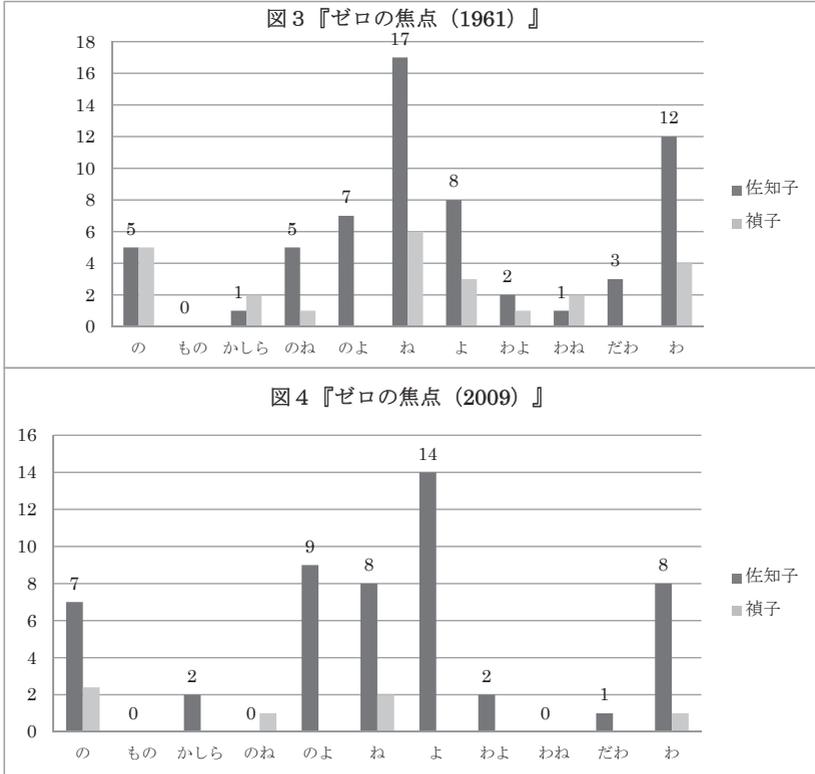


図3と図4、『ゼロの焦点』について。図3と図4ともに禎子よりも佐知子の方が女性文末詞の使用が全体的に多い。図3では、禎子と佐知子の使用差はあるが、2人ともわ系、「のよ」、「のね」、「かしら」も用いて会話をしていた。しかし、図4では、佐知子の女性文末詞の使用は多くみられたものの、禎子は「わ」「ね」「のね」「の」しか使用していなかった。これは、1960年代では女性文末詞の使用は通じてあったのに対し、2000年代では女ことばの衰退の影響によって禎子の文末詞の使用が抑えられたのではないだろうか。しかし、佐知子の文末表現の使用に禎子ほど変化が見られないのは、現代における女性文末詞の持つイメージが関わっているのではないかと考える。禎子と佐知子の差を考えた際、佐知子は社長夫人であり富裕層に属していることが違いとしてでてくる。従来女性文末詞は上品な印象を与えるのであろう。

5. 2 作品ごとの考察

まず、『時をかける少女』の調査結果の1983年と2010年の表を参照すると、あきらかに作品内での女性文末詞の使用が減っていることがわかる。考えられることとして、1983年の作品は80年代を舞台としているのに対して、2010年の作品は、映画がつくられた年を舞台としているということであるから、実際の女性文末詞の変化を映画に反映してつくられたのではないかと考えられる。そう考えると現在使用されている女性文末詞は減少しているという意識があるのではないだろうか。

『ゼロの焦点』の調査結果も1961年の作品と2009年の作品とで比較すると、2009年の作品の方が女性文末詞の使用が少ない。しかし『時をかける少女』よりも女性文末詞使用の差があまりみられないのは、時代設定によるものではないかと思う。1961年の作品はそのままおよそ60年代を舞台としているが、2009年作品は映画が作成された年と時代設定が異なる。つまり2009年に60年代の作品がつくられたことは、現在の女性文末詞の使用が減少傾向にあったとしても、60年代に使用されていた女性文末詞は多かったという認識があるために、使用差が『時をかける少女』のように顕著には表れなかったのではないだろうか。

5. 3 女性文末詞の減少傾向

次の表は映画を制作された年の順に左から並べている。各作品の調査対象の人物を区別せずに、作品内での女性文末詞使用を表にした。また、それぞれの作品の女性文末詞の合計を算出した。

	ゼロの焦点 (1961)	時をかける少女 (1983)	ゼロの焦点 (2009)	時をかける少女 (2010)
わ	16	26	9	1
だわ	3	9	1	1
わね	3	4	0	0
わよ	3	2	2	0
よ	11	21	14	9
ね	23	17	10	14
のよ	7	4	9	1

のね	6	3	1	0
かしら	3	5	2	1
もの	0	3	0	1
の	10	30	7	15
合計	85	124	55	43

上の表から、女性文末詞の種類に限らず、合計でみると、1961年『ゼロの焦点』と1983年『時をかける少女』の作品は、2009年『ゼロの焦点』、2010年『時をかける少女』のそれぞれの合計と比較して、女性文末詞の使用比率が高いということが分かった。このことから、1980年代までは、女性文末詞の衰退が目に見えて目立ってはいなかったが、それ以降から現在に至るまでに、女性文末詞の意識が変わり、衰退傾向にあるのではないかと考えられる。

また、全体的に「よ」「ね」の使用率が多くみられた。年代を通してこのような結果が表れたということは、「よ」と「ね」は女性文末詞の中で、衰退傾向が緩やかなのではないかと思う。60年代と80年代のわ系の文末詞の使用が多いということは、80年代頃まではまだ、わ系の文末詞の衰退が現在よりも進んでなかったと考えられる。

6. おわりに

今回の調査によって、女性文末詞がいつ頃から衰退傾向にあるのかということの確認と、やはり女性文末詞は現在、衰退に向かっていているという事実を見定めることができた。

女性文末詞が衰退している要因として、時代背景が深くかかわっていると思う。主に、女性の社会進出と密接しているのだろう。現在の社会で、日常の生活を送っていると、男ことば、女ことばの区別が曖昧になってきていると感ずることがある。一般的に「女ことばが使われなくなってきた。」と言われることが多いと思うが、実際は今回調査することはできなかった男ことばも使われなくなっているのではないかと思う。これから女ことばも、男ことばも使用されなくなっていくのかということではなく、女ことばも、男ことばも両方が近づいてきたということなのではないだろうか。

言語というものは、今も昔も、これからも、変わり続けていくものである。その変化は否が応でも受け入れるしかないとも思う。流れを止めることはで

きないのなら、せめて流れに身を委ね、変わり続けていく日本語に関心を持ち続けていきたい。

参考文献

- 有泉優里 (2009) 「女ことば」と「男ことば」の使用基準が切り替わる心理過程—プライミング手法を用いた検討—『日本語とジェンダー』vol. 9
- 有泉優里 (2013) 「会話文末における「男ことば」と「女ことば」の分類：ジェンダー識別傾向とジェンダー特異性を指標として『日本語とジェンダー』vol. 13
<http://www.gender.jp/journal/no13/12ariizumi.html>
- 井出祥子 (1979) 『大学生の話しことばにみられる男女差異』科研費報告書
- 小川早百合 (1997) 「現代の若者会話における文末表現の男女差」『日本語教育論集—出詞子先生退職記念—』凡人社, 205-220.
- 小川早百合 (2004) 「話し言葉の男女差—定義・意識・実際—」『日本語とジェンダー』vol. 4, 日本語ジェンダー学会: http://www.gender.jp/journal/no4/B_ogawa.html
- 尾崎喜光 (1999) 「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会 (編) 『女性の言葉・職場編』ひつじ書房33-58
- 川口容子 (1987) 「まじり合う男女のことば—実態調査による現状—」『言語生活』492
- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語—若い世代のことばの「中性化」について—」『日本語学』12-6
- 下條正純 (2008) 「テレビの吹き替え表現における男性文末形式の現実と虚構」『研究論文集—教育系・文系の九州地区国立大学間連携論文集—第2巻第1号』
- 鈴木英夫 (1998) 「現代日本語における女性の文末詞」『日本語文末詞の歴史的研究三弥井書店139-164
- 中島悦子 (1999) 「疑問表現の様相」現代日本語研究会 (編) 『女性の言葉・職場編』ひつじ書房59-82.
- マグロイン・花岡直美 (1997) 「終助詞」井出祥子編『女性語の世界』明治書院33-41
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルタ—文末詞(終助詞) 使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』vol. 5 日本語ジェンダー学会23-46.
- 水本光美 (2006) 「テレビドラマと実社会における女性文末使用のずれにみるジェンダーフィルタ」、日本語ジェンダー学会 (編) 『日本語とジェンダー』ひつじ書房

73-94.

水本光美・福盛壽賀子・福田あゆみ・高田恭子 (2006) 「ドラマに見る女ことば『女性文末詞』—実際の会話と比較して—」『国際論集』第4号, 北九州市立大学 51-70.

水本光美・福盛壽賀子 (2007) 「主張度の強い場面における女性文末詞使用—実際の会話とドラマとの比較—」『国際論集』第5号, 北九州市立大学13-22.
http://www.kitakyu-u.ac.jp/laic/kiyou/2007_kr1_5/2007_kr1_5.html

水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2008) 「ドラマに使われる女性文末詞—脚本家の意識調査より」『日本語とジェンダー』vol. 8

水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞—実社会における使用実態調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』vol. 9

三井昭子 (1992) 「話しことばの世代差—終助詞と副詞を中心に—」『ことば』13

安田芳子・小川早百合・品川なぎさ (1999) 「現代日本語における男女差の現れと日本語教育—意識・実態調査の分析—」『小出記念日本語研究会論文7』

分析作品

『時をかける少女』(1983) 大林宣彦 監督

『時をかける少女』(2010) 谷口正晃 監督

『ゼロの焦点』(1961) 野村芳太郎 監督

『ゼロの焦点』(2009) 犬童一心 監督